八尾市教育センターNEWS

令和7年2月
所報：406号

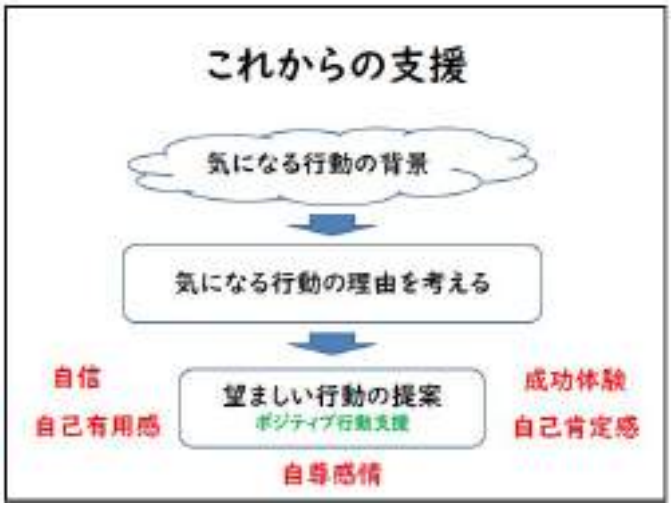
相談支援係
072-941-3365

情報チーム
072-943-5785

研究研修係
072-943-5784

教育センター
Web page は
こちらから

特別支援教育コーディネーター研修⑤
通級指導教室担当者会⑩



令和７年１月９日（木）午後３時３０分～午後５時に特別支援教育コーディネーター研修⑤・通級指導教室担当者会⑩を行いました。講師は梅花女子大学大学院　伊丹　昌一　教授で、研修テーマは「自己肯定感を高めるためのアプローチ」です。

←研修使用資料

＜受講者感想＞

・自己肯定感の低さから問題行動を起こしてしまう子、という所で一人の子どもを頭の中に浮かべながら講義を聴いた。指導や対応がなかなかうまくいかないことに悩んでいたので、「ほめる」と「認める」の話はなるほど、と納得できた。これから「ほめる」と「認める」の違いを意識して声かけをしていきたいと思う。

・自己肯定感を高めるために、自己受容・自己理解・自己有用感・自己効力感を高める必要があること、それぞれの言葉の意味や学校でつけたい力などを改めて学ぶことができた。「意欲＞能力」を意識し、子どもが「できた」「楽しい」と意欲的に取り組んでいけるようにしていきたいと思った。自尊感情を高めるかかわり方をして、個々の特性や性格に合わせた声かけや対応をしていけるように、これからも学び続け・目の前にいる子どもにフォーカスしていこうと思う。

・２つの学力の話を聞いて、低次の学力の身についていない生徒に高次の学力を求めたり、そのために無駄な努力を強いたりしていることが、学校現場はまだまだ多いと感じる。「合理的配慮」は「楽をさせること、えこひいきをすること」ではなく「スタートラインをそろえること」であるという認識を広め、学校全体で「自尊感情を高めるかかわり」をしていけるように、努力していきたい。

幼児教育研修＜管理職ステージ研修＞

令和７年１月１０日（金）午後３時～午後５時に幼児教育研修＜管理職ステージ研修＞を安中ひかりこども園２階遊戯室で行いました。講師は「フェリアン」の　津村　薫　副所長で研修テーマは「ラインケア研修　保育者がいきいきと働く職場づくりに向けて」です。

＜受講者感想＞

・今まで自分はあまり「ストレス」を感じずに仕事をしてきたが、近年自分の変化に戸惑うこ

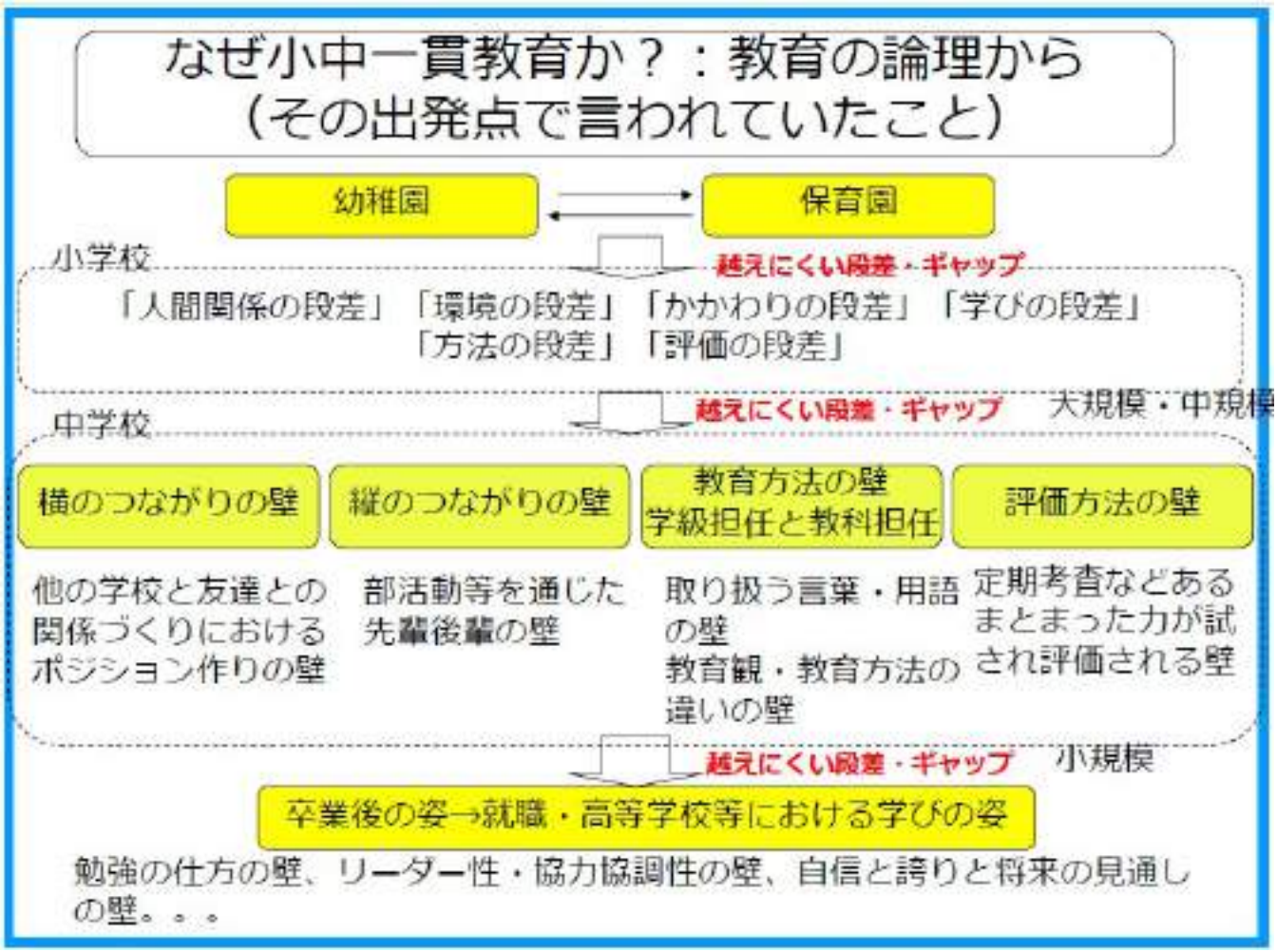
とがある。今日の研修を受講して「考えを改めるべきところ」「具体的な考え方の手法」を知ることができた。研修で学んだことを活かしながら本園の職員に対してサポートしていきたい。

・「助けを求められるように、自分の弱さを見せることは強いこと」という講師の言葉に、心が軽くなった気がした。業務軽減にも取り組み、働きやすい職場環境を実現していきたい。NEAT も生活の中に取り入れ、自分自身の心身の健康も大切にしていきたいと思う。
※NEAT　Non-Exercise-Activity Thermogenesis
非運動性活動によるエネルギーの消費（生活の中で体を動かすこと）

・あたり前のことを続けてくれていることへの言葉がけを大切にしようと思った。また、職員が長く楽しく働いていくためには、管理職が楽しくいきいきできていることが大切だと改めて感じた。

小中一貫教育研修②

令和７年１月１０日（金）午後３時～午後５時に小中一貫教育研修②を行いました。講師は関西大学の　小柳　和喜雄　教授で、研修テーマは「小中一貫教育の意義と担当者の役割について」です。冒頭、教授からの講義があり、その後中学校区に分かれて今年度の取り組みについて交流し、成果と課題をホワイトボードにまとめて全体で共有しました。



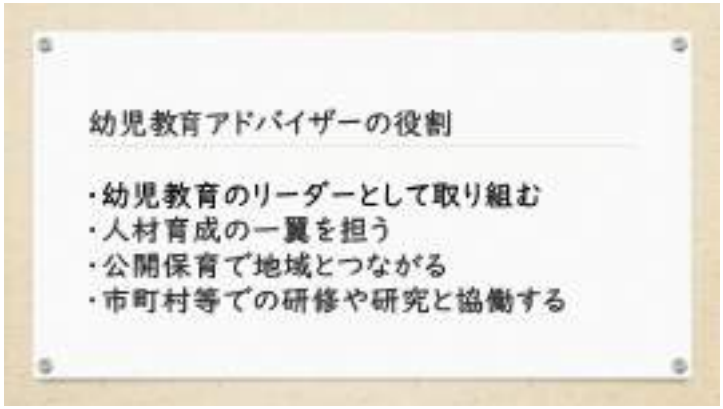
＜受講者感想＞

・小中での担当者だけではなく、全職員が関われる機会を設けたり、児童と生徒が関わる機会を設けたり、つながりをもてるようにできればと思った。また、コロナで縮小された行事や合同の活動についても考え直すきっかけとなった。

・数値では測れない部分はあると思ったものの、子どもたちが主体になる児童会・生徒会活動を「自ら行った」と感じられるようにできれば、様々な数値が上がってくると思われる。また、今行っている活動が数値ですぐに現れなくとも子どもたちのリアクションから成果を感

じ、続けることにも意味があるとも感じた。
・学力に関して、中学校区で前年度より向上していたので、成果を感じた。取り組みに間違いはなかったなと自信になった。今後は、自己肯定感の向上や中一ギャップの解消についても、効果的な取り組みを考えていきたい。

幼児教育アドバイザー・フォローアップ研修⑤

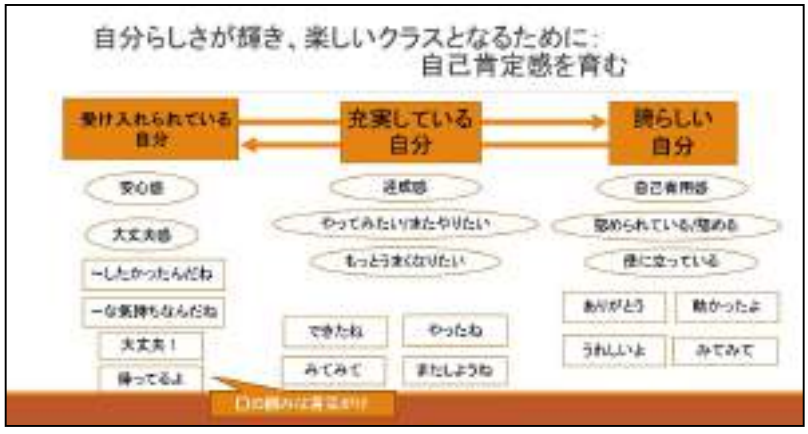


令和７年１月１５日（水）午後３時～午後５時に幼児教育アドバイザー・フォローアップ研修⑤を行いました。講師は本センターの　天野　千晶　補佐で、研修テーマは「幼児教育アドバイザーによる企画研修について」です。

←研修使用資料

＜受講者感想＞
・研修立案時の０→１にするところの大切さと難しさ、どこをピックアップしていくのか、などについて、自分事として考え直すことができた。「正解はないけれど、道筋はある」という言葉に、保育者との話し合いや学習会（園内研修）での自分の働きかけをこれからも学んでいきたい。
・実際に企画・立案しないとわからないことが多く、自分だけではわからないこともあったので、実践の大切さがよく分かった。自分が苦手なことにも、他の先生方の力を借りて取り組むことができた。
・この研修では、考えなければならないことばかりだったが、自分の身についた感じがある。園内の学習会や研修会は続いていくが、気持ちを新たにして、今回の研修で学んだことを活かしていきたい。

幼児教育研修＜保育と講演＞

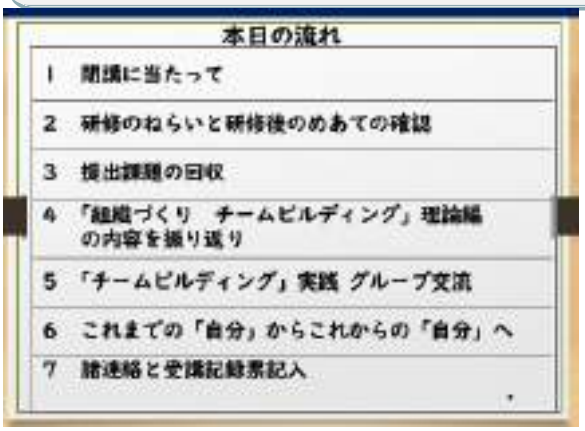


令和７年１月１６日（木）幼児教育研修＜保育と講演＞を西郡そよかぜこども園で行いました。公開保育は５歳児の「そらぐみ」（保育者：大谷　亜紀・滝川　美奈子・平山　亜利紗）と「ほしぐみ」（保育者：土井　めぐみ・佐々木　恵理子）です。午後から会場を八尾市立桂人権コミュニティセンターに移し、武庫川女子大学　鶴　宏史　教授から指導・講評・講演をしていただきました。研修テーマは園の研究テーマに沿って「心も体もげんきいっぱい、自分らしさ輝くこども園～心地よいそよかぜの中　育ちあい認め合おう～」です。

＜受講者感想＞
・どちらの学級も“自分らしさ”“育ちあう”をたくさんの場面で見取ることができた。担任が日々の保育生活の中で、子どもたちのありのままの姿を肯定的に受け止め、その子らしく活動できるように考えているように感じた。講演の中では「保育者が言葉のかけっぱなしになっていないか」という言葉が印象に残っている。この観点で自分の日常の保育を見直して

いきたい。
・学級の中で、「ありがとう」「すごい」「おめでとう」などホットな言葉をたくさん聞くことができた。こんな学級の雰囲気に自分自身もほっこりした。自分でもこんな学級づくりを心掛けていきたい。講演では「サポートを必要とする子ども、それ以外にも配慮が必要な子どもをも含めた集団作りが必要」との言葉があり、自分の学級運営を見直す良い機会になった。
・研究討議の時ＳＨ法という画期的な方法がとられていて、意気込まず思ったことを言い合える雰囲気でよかった。できたら自園でも取り入れていきたい。子どもたちだけでなく先生方の「自分らしさ」を大切にされているのが伝わってきた。
※ＳＨ法（西郡そよかぜこども園が独自に開発したもので、ＳＨは「しゃべりたい、放題」の省略形です。）

１０年経験者研修④

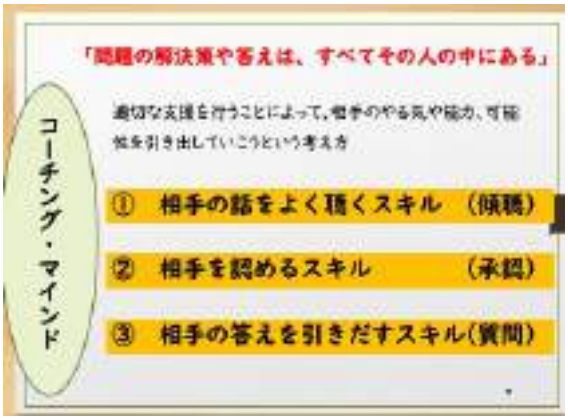


令和７年１月１７（金）午後３時～午後５時に、１０年経験者研修④を行いました。講師は本センター　生田　祐敬　指導主事で、研修テーマは「組織づくり　チームビルディング【検証】閉講にあたって」です。

←研修資料の一部

⇦⇩ 研修使用資料

＜受講者感想＞

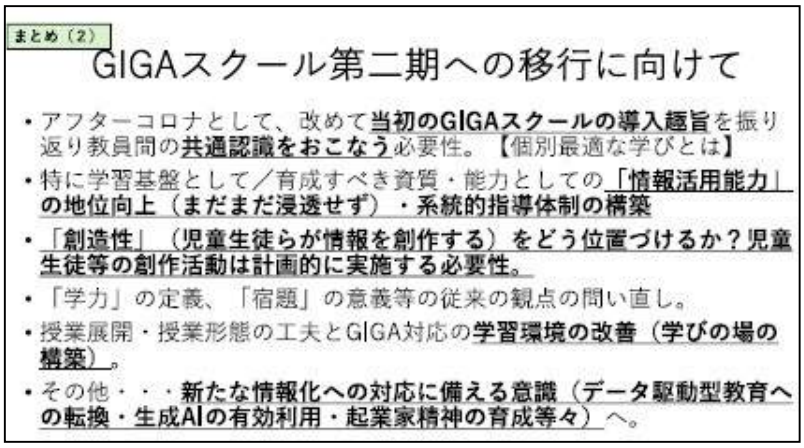


・この１０年、自分自身は何も変わっていないように感じていたが、周りの環境もすべきこともすべて変わっていると認識することができた。今後努力を重ね、自分自身もよりよく変わっていきたい。
・同世代の先生方の実践を聞くことができてとても良かった。同じような悩みを持っている事がわかった。チームビルディングについての話し合いでは、コミュニケーションの大切さを再認識することができた。
・１０ 年目がミドルリーダーだということを再認識した。意見交流をする中で、校内でも校外でも中心的役割を果たし、先輩の先生と経験年数の少ない先生との間で活躍されている話を聞き、大いに刺激を受けた。

ICT 担当者研修②

令和７年１月２０日（月）に中学校（義務教育学校後期課程を含む）、１月２７日（月）に小学校（義務教育学校前期課程を含む）、それぞれ午後３時３０分～午後５時に ICT 担当者研修②をオンライン web で行いました。講師は和歌山大学教育学部教職大学院 豊田 充崇　教授で、研修テーマは「GIGA スクール第二期でめざす『個別最適な学び』の実現に向けた授業観・学習観の転換」です。

↓研修使用資料



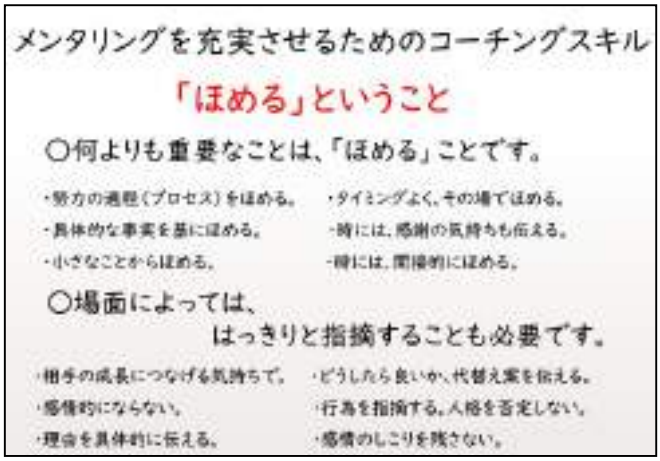
＜受講者感想＞

・ICT の活用の仕方について知ることができた。例えば、タブレットを見てやり方を真似して学習する生徒や、タブレットを少し参考にして学習する生徒や、タブレットの説明を一回見るだけでひとりで解いていく生徒など、生徒の実態に合わせた ICT の活用の仕方があるということを初めて知ることができた。また、情報を活用する能力を ICT を活用する中で身につける必要があることを知った。

・個別最適化された学びが、孤独な学びにならないように、というお話がとても印象的だった。自分で学ぶだけではなく、協働的な学びになることの例として、様々な授業やデジタルコンテンツなどを教えていただけて参考になった。動画の使用方法等とてもわかりやすく、自分も取り組んでいけそうな授業の作り方だと感じた。新しい時代の学び方として自分自身もアップデートしていかないといけないと感じた。

・「学習の個性化」について、たくさんの具体的な事例を見せていただく中で、児童がどんどん主体的に創作していくことに、教師として明確な評価基準を用いる必要があるのだと感じた。評価をどのように提示するかで、児童がめざすべきゴールがはっきりすると思う。たくさん具体的なサイトや事例をもとにお話ししていただいたので、校内で伝達し広げていきたい。

５年経験者研修会④



令和７年１月２１日（火）午後３時～午後５時に５年経験者研修会④を行いました。講師はで本センター　生田　祐敬　指導主事で、研修テーマは「組織づくり　メンタリング【検証】」です。

←研修使用資料

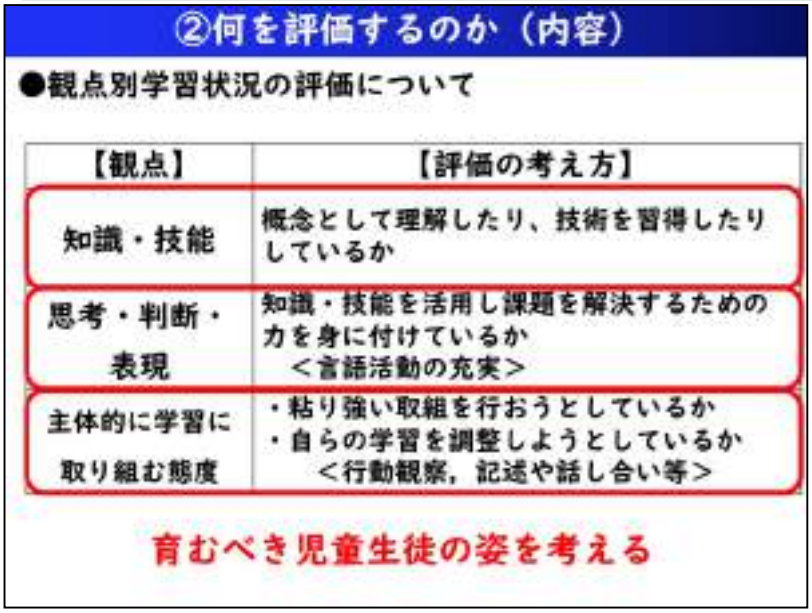
＜受講者感想＞

・「教員の当たり前」は初任者にとって「当たり前ではない」と感じることが多かったようだ。自分自身も同じように感じたのを思い出した。班の人の実践から多くの学びがあった。自分自身のこの１年の実践の振り返りをもとに、これからは自分のことだけで一杯一杯になるのではなく、広い視野や後輩の先生を支える自覚をもちたい。まずは自分からたくさんコミュニケーションをとり、自分の強みである親しみやすい雰囲気を生かしていきたい。

・改めて５年経験者研修では、他校の５年経験者教員の実践を聞いて、もっと自分も成長しなければならないと感じた。今日の最後に、「中堅職員としてどのように働くか」について考えたことは、しっかりと計画を練って来年度に実践していきたい。

・メンタリングを進めるにあたって、自分に自信がなく、これであっているのかと不安になる場面が多々あった。しかし、この研修で他の先生方の実践を知ることで、自分の自信にもつなげることができた。また、新たに自分の課題に気づくことができたので、今後はその課題解決に向けて頑張りたいと思う。

第１８回初任者研修「授業づくり⑧」



令和７年１月２３日（木）午後３時～午後５時に第１８回初任者研修「授業づくり⑧」を行いました。講師は本センター　吉田　光秀　指導主事で、研修テーマは「授業づくりについて」です。

←研修使用資料

＜受講者感想＞

・研修の事前課題に取り組む中で、改めて「指導→評価→指導」という「指導と評価の一体化」の視点の重要性について感じた。研究授業後に、実際に ICT 機器の活用について改善し、実践してきた。そのなかで新たな課題も見出し、改善を繰り返すことで生徒の変容も見えてきた。
・自分のグループでは、時間配分の仕方や子どもたちの理解度の把握が話題に上がった。改善点として、子どもたちの思考の時間を多くとることとそれを踏まえた時間配分計画を立てることが大切だという意見が出た。また、より簡潔で子どもたちが理解しやすい発問をすることの必要性も確認された。何より、私自身教材研究の質を上げなければならないということを実感した。
・指導案を書き実際に授業をすることは大変なことではあるが、自分自身の学びにとって大切なものだと感じた。実際に書いた指導案を他の初任者の人と協議することで、悩みを共有することもできると同時に解決の手がかりを得られたように思う。子どもの実態を把握し、授業をすることが少しずつできているなと実感している。今の状況に満足せず、日々向上していけるようにしたい。

障がい理解・啓発推進研修

令和７年１月２８日（火）午後３時３０分～午後５時に障がい理解・啓発研修を行いました。講師は特定非営利活動法人「COLORS」佐藤　朋代　さんと大阪ＬＤ親の会「おたふく会」八木　悦子　さんで、研修テーマは「保護者や当事者の思いに寄り添った支援とは～ペアレント・メンターの話から～」です。

＜受講者感想＞

・お二人の話で共通していたのは「先生が親身になって話を聞いてくれたこと」、「良いところをしっかり見て伝えたくれたことがうれしかった」ということです。私も保護者に寄り添える教師でありたいと思った。
・社会に出た時に「～ができない」と言えることは、障がいのあるなしに関わらず大切だと思った。今日のお話を伺って、自分のすべきことは子どもだけじゃなく、保護者にも向き合うことだということを改めて感じることができた。
・保護者目線の真っすぐな本音が心に響いた。不安でカチカチになった保護者の心をお子さんの肯定的に観察した様子を伝えることで、少しずつ安心や信頼が生まれるということが分かった。

研究協力員成果報告会

A分科会	B分科会
① 国語科部会	① 情報教育部会
② 外国語部会	② 社会科部会
③ 道徳部会	③ 算数・数学科部会
④ 理科部会	④ 特別支援教育部会
⑤ 食育部会	⑤ 体育科部会
⑥ 人権教育部会	⑥ 事務部会

令和７年１月31日(金) 午後３時３０分～午後５時に研究協力員成果報告会を行いました。研究協力員は、教育委員会の委嘱を受けて、それぞれのテーマに沿った研究を行い、その成果を報告します。また研究成果を、「研究紀要」とデジタルでまとめ、市内全小中学で活用していきます。

＜受講者感想＞

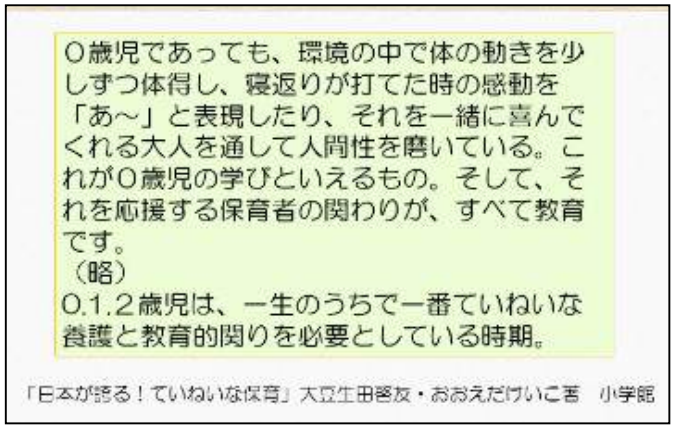
・今回初めて研究協力員に参加した。「授業中に深い学びをどう生み出すか」を１年間かけて考え自分の授業でも深い学びにつなげられることが出来たのではないかと思う。個別最適な学びや協働的な学びを含めた、深い学びを次年度も授業内で展開できるよう、引き続き研究を重ねていきたいと思う。

・研究協力員として参加し、大切にしたい観点を共有しながら何度も教材を練り上げ、そして実践することによってブラッシュアップすることができた。八尾市人権教育研究会や中河内人権教育研究協議会と学習を共催することで、多くの方のご意見や思いを反映することができたのではないかと感じる。資料で学んで終わりになるのではなく、子どもと授業者がともに考え、それぞれが当事者として課題解決のために行動しようとする場面設定を大事にし、実際に行動に移せる子どものの力を育みたいと考える。

・「給食ブギウギ」を初めて聞いたが、聞いたことのあるメロディーで親しみやすい。学びが生活の一部にするりと入り込んでおり、子どもたちの中にもより実感をもって定着するだろうと想像できた。また、実際の生産者の方々の姿があることにより、授業の中でのことではなく生活の一部であることが体感的に伝わるのではないかと思った。

令和５・６年度　幼児教育研究―２年次　研究発表会―

令和７年１月30日（木）午前９時30分～午後２時30分に令和５・６年度　幼児教育研究―２年次　研究発表会―を南山本せせらぎこども園で行いました。研究テーマは「みんなでつくろう　ほっと安心　笑顔いっぱいのこども園　～自分も大事　みんなも大事～」です。午前は１時間３０分公開保育（0～５歳児、一時預かり）を各保育室・園庭で行った後、「自分も大事　みんなも大事にする子どもの学びや育ちとは」をテーマに意見交流会を行いました。午後からは園からの研究発表があり、その後、常磐会短期大学　藤原　範子　非常勤講師から指導講評と「豊かな学びや育ちにつながる教育・保育とは」をテーマにご講演をしていただきました。



←研修使用資料

＜受講者感想＞

・どの学年も子どもたちが生き生きと自分のしたい遊びを夢中になって遊んでいる姿が印象的でした。きっと先生たちが子どもたちのつぶやきを丁寧に拾い、それを実現できる環境を整えてかかわってこられたからだと思いました。

・子どもが主体的に遊び・気づき、“自分も大事　みんなも大事”と思えるようになるには、先生方の細やかな連携と話し合いも必要だったし、保育者同士の関係の根幹にも“自分も大事　みんなも大事”という礎があってこその、子どもたちの姿につながったのだと感じました。

・場の設定として、掲示物も有効に使われており、子どもたちの意欲や自信につながる工夫がたくさんありました。就学前で遊び込んだ子どもたちの集中力を小学校の生活で活かしつつ、切り替えの取り入れ方を考えていきたい。

・「悩みは繰り返すし、何回も立ち戻って確認することが必要である。それの経験を積み重ねた保育者は常に新しいところに戻してもらえる」という言葉は、まさに研究を続けていく意義だと思いました。

教育センター「情報公開コーナー」

教育センターＢ棟（東側）の２階に「情報公開コーナー」があります。各種教育関係図書・雑誌等を配架しています。もちろん「教科書センター」として八尾市で採択している教科書や他社の教科書もあります。研修等で来所された時に直接ご覧いただければ幸いです。教科書・その他書籍・雑誌等も２週間の貸し出しを行っております。今回は１月から２月に配架した雑誌の誌名と目次の一部を紹介いたします。

「月刊学校教育相談」（ほんの森出版）２月号
・特集１　単学級や小規模校で人間関係の力を育てる
・特集２　「個別の指導計画」の評価と見直しのポイント

「指導と評価」（日本教育評価研究会）２月号
・特集１　教科担任制
・特集２　「食べる」を考える

特集テーマ設定の理由説明は「学校給食は日本独特の制度として世界から注目を集めています。」という文で始まっています。「日本独特」のものが、今になって「世界から注目をあつめている」のは、学校給食だけではありません。もちろんプラス評価だけではないかもしれませんが、文化・歴史・制度等、日本独特のものが注目されています。さらに説明文は「毎年１月２４日～３０日は『全国学校給食週間』と定められ、児童生徒や教職員、保護者、地域住民の理解や関心を高めるための取組がなされています。」と続きます。もちろん八尾市でも取り組んでいます。その様子につては文末のＱＲコードからご覧ください。

法律も「食育基本法」が２００５（平成１７）に施行され、それに基づいて「食育推進基本計画」が策定され、現在は第４次に至っています。その一方、「近年、肥満や痩身などの栄養が偏った子ども、朝食をとらずに登校する子ども、さらに給食だけが命綱という子どもが増えました。」という食に関する課題も述べられています。そこで「本特集では、子どもを取り巻く「食」の状況や問題について、給食を中心にさまざまな立場から考察します。」

とのことです。「子どもの食生活の課題と学校に求められる食育の推進」と題して東京聖栄大学　田中　広美　専任講師が執筆されています。令和６年度の「全国学力・学習状況調査」によると朝食を食べずに登校する割合は小学生が 6.3%、中学校が 8.6%だそうです。この数値は増加傾向です。原因としては「夜型生活」が多くなり、「時間がない」「食欲がない」ということが挙げられます。こういった食生活の乱れは「肥満だけではなく、体力や学力に悪影響を及ぼす」ということになるそうです。さらには生活習慣病の原因にもなりかねません。対策としては「共食」をすすめておられます。家族と共に食事をすることで、栄養バランスの良い食事ができやすいとともに「心身の健康の保持・増進にも有効」とのことです。学校においては「学校給食法（平成２０年改正）」では「第３章　学校給食を活用した食に関する指導」の第１０条に「栄養教諭の職務」が明確化され、「学校給食が食育の重要な教材」としての役割を担っていることがわかります。文部科学省によると栄養教諭は①個別的な相談指導（肥満傾向、過度の痩身、偏食傾向の児童生徒や食物アレルギー等）②教科・特別活動における教育指導（学級担任、教科担任との連携）③食に関する指導の連携・調整（学校全体の食育指導計画作成や職員・保護者等との連携）が示されています。田中先生は栄養教諭のさらなる配置拡大が重要であると述べられています。

「食文化を継承する ―食文化を伝える砦としての学校給食の役割ー」と題して十文字学園女子大学　伊藤　美穂　講師が執筆されています。日本の学校給食の目的は「栄養摂取による子どもたちの健康の保持」を中心とすることから「食文化を伝える場」へと変わりつつあるということです。「和食」は２０１３年１２月にユネスコ無形文化遺産に登録されましたが、その一方で日本人の食生活は「欧米化」しています。そこで、学校給食で「旬の食材で四季を感じ、行事や地域特有の食を大切にしてきた日本の伝統的な食文化」を伝える役割が学校給食に期待されているそうです。給食の起源は１８８９（明治２２）年とされているそうですが、第二次世界大戦後の１９５２（昭和２７）年には全国の小学校でパン、ミルク、おかずの「完全給食」が実施されました。その後、１９５４（昭和２９）年に「学校給食法」が制定されて現在に至っています。１９７６（昭和５１）年には米飯給食が導入されました。法律では２００５（平成１７）年に「食育基本法」が施行され、「食育」の推進が求められてきました。現在は「第４次食育推進基本計画」が進行中です。この計画の中で、「持続可能な食を支える食育の推進」が重点事項にあげられ、「食文化の継承のための活動への支援」が示されています。学校・保育所等においては栄養教諭配置の促進、十分な給食時間の確保、米飯給食の実施、地域の生産者との連携、地場産業や国産食材の活用、伝統的な食文化についての理解を深める給食の普及、学校給食の充実が挙げられています。伊藤先生は「米飯給食にはパンや麺の時と比べて主菜の調理方法や味付けが多様であり、食材の組み合わせが多様である」というメリットを指摘されています。また「食文化」を伝えるという意味において「郷土料理」についても紹介されています。2007 年実施の調査を紹介されていますが、その頃の「郷土」とは「地方」を意味していて、沖縄県以外では「地方（国内）」の料理が取り上げられることが多かったそうです。文部科学省は「学校給食実施基準の一部改正について（通知）」（2021 年）では「学校給食に郷土料理を取り入れ、地域の文化を継承する」と記載し、ここでは「生まれ育った地域」の食文化を継承することが重

要であるとされています。さて大阪府では「なにわの伝統野菜」を指定していて栽培・活用を推進していますが、本市においては特産品の葉ごぼう（若ごぼう・八尾ごぼう）や枝豆、地元産の小松菜などを積的に学校給食に取り入れています。伊藤先生は文末で、献立にふさわしい食器について述べられています。「米飯と一汁二菜（または三菜）」という和食の基本型を考えると、飯と汁物は陶磁器に盛るのが望ましいとのことです。

「道徳教育」（明治図書）２月号
・特集　渾身の「命」の授業　Best Selection

「特別支援教育研究」（全日本特別支援教育研究連盟編集・東洋館出版社）２月号
・第１特集　自閉スペクトラム症支援の最前線
・第２特集　変化する社会の中で自分らしさを生かし生き生きと輝く子どもたち
～教育的ニーズに基づいた一人一人の育ちを求めて～

「初等教育資料」（文部科学省教育課程課・幼児教育課編集　・東洋館出版社）２月号
・特集Ⅰ　言語活動の充実を通した授業の改善
・特集Ⅱ　[図画工作]発想や構想に関する指導の充実

「中等教育資料」（文部科学省教育課程課・学事出版）２月号
・特集　各教科等の特質に応じた体験活動の重要性

「論説」（各教科等の特質に応じた体験活動の重要性）の中で関西大学総合情報学部　黒上　晴夫　教授は「テクノロジーと体験はトレードオフか」というテーマで執筆されています。ちなみに「トレードオフ」とは「一方を追求するともう一方を犠牲にしなければならないという、二律背反の状態のこと」です。テクノロジーとはコンピューターなど ICT 機器のことです。黒上教授は「トレードオフではない。」との見解です。テクノロジーだけではだめ、体験だけではだめ、ということです。１９９０年代の導入期にから言われてきたことですが、AI 活用の仕方が問題となる今、同じことが言えるのかもしれません。黒上教授によると、19 世紀には産業革命期の影響で記憶や反復を重視した教育が流行りましたが、その後アンチテーゼとして体験活動重視の考えが広がりました。しかし「体系的知識の獲得には結びつかない」として「這いまわる経験主義」との批判がなされてきたとのことです。一方、教育へのテクノロジーの導入に対しては「旧来の教育の破壊につながる、あるいは効率を低下させる」との批判がなされてきました。これらの手法（体験とテクノロジー）を教育から引き算すると、残るのは「体験とテクノロジーに依存しない体系的な学習」ということになるでしょうか。それが「主体的・対話的な深い学び」を求める現代の教育を実現す黒ことはできません。では、体験とテクノロジーの関係はどうかというと、黒上教授は１９９０年代から今日まで、様々な教育実践の中でテクノロジーと体験が融合されてきた例を示しながら、これからの学びの形を提言されています。どうも最近は、「テクノロジー＝バーチャル（仮想現実）」というような表現が為されることで、敵対するようにも言われがちですが、本当は相性がいいようです。　（葭仲）

教育科学「国語教育」（明治図書）２月号
・特集　もっと子供主体の授業にしたい！　一達人へのステップアップ

教育科学「社会科教育」（明治図書）２月号
・特集　デキる人はやっている！　社会科教師の仕事術

「新しい算数研究」（新算数教育研究会編集・東洋館出版社）２月号
・特集　資質・能力の評価の充実を軸に捉え直す